

平成22年5月27日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520674

研究課題名（和文） 古墳文化の地域性に関する地理学的研究—九州と近畿を中心に—

研究課題名（英文） Geographical studies on distribution and diffusion of Japanese keyhole-shaped mounded tombs in the *Kyushu* and the *Kinki* region

研究代表者 出田 和久 (IDETA KAZUHISA)

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：40128335

研究成果の概要（和文）：地理情報システムを利用した前方後円墳のデータベースを構築して、九州と近畿を対象に前方後円墳を中心とする古墳文化の受容のありようとその地域的な展開を、分布論的にアプローチした。その結果、①両地域における大型前方後円墳の比率の時期別推移に大きな相違がみられること、②代表的威信財である三角縁神獣鏡と画文帯神獣鏡の時期別分布は両地域で大きな差違があり、近畿では画文帯神獣鏡の分布が中心部に集中する傾向が強いこと、③時期別・規模別に検討を加えた結果、九州地方では前方後円墳の階層性は地域的には一様ではないこと等、分布に関連して多くの興味深い知見が得られた。

研究成果の概要（英文）：There are many Japanese keyhole-shaped mounded tombs (*Zenpoukouenhun*) in the Kyushu region as well as the Kinki region. In the beginning I made the GIS database of *Zenpoukouenhuns* in both areas. I researched the distribution of the *Zenpoukouenhuns* in both areas by using the database. As a result, I obtained the following results for this research. The great divergence must be seen by the transition of the ratio of large-scale *Zenpoukouenhuns* in both regions according to time. There are great divergence between the distribution of *Sankakubuchi-shinjukyos*(a kind of bronze mirror which was buried together with a dead body of lord) and *Gamontai-shinjukyos*(a kind of bronze mirror which was buried together with a dead body of lord) that are typical prestige goods according to time in both regions, and the distribution of the latter tends to concentrate on the central portion in the Kinki. The hierarchy of the *Zenpoukouenhuns* shall not be regionally the same in the Kyushu region as a result of examining them according to the scale and time. This research found a lot of interesting events for the distribution of the *Zenpoukouenhuns* in the Kyushu region and the Kinki region.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：歴史地理学・人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：前方後円墳、分布、地域性、九州、近畿、地理情報システム、データベース、考古地理学

1. 研究開始当初の背景

(1)①古墳時代は日本列島に古代国家が成立する揺籃期であるが、文献の一次史料を欠くために、考古資料に依拠することが多い。

②古代国家の成立は、大陸文化との関連なくしては考えられないことはいままでのない。したがって、その大陸への門戸である九州の古墳文化の実像を明らかにすることは重要である。

③九州の古墳文化の地域的特色は、古墳文化の中心地域である近畿地方（畿内）と比較対照することにより明らかにできるはずであるが、そのような視点からの歴史地理学的研究はもちろん考古学からの研究も少ない。

(2)①考古学では、前方後円墳という古墳の形態の拡散・伝播はいわば畿内・大和の王権が中心となった政治勢力による支配領域の拡大を示すとして「前方後円墳体制」と称している。

②考古学では「前方後円墳体制」は定説として扱われているが、各地域における前方後円墳の形態や内部構造・内部主体さらには副葬品の特色等を具体的に検討するという、実証的な検証は必ずしも十分とはいえない。

③歴史地理学からの前方後円墳を対象とするアプローチは、もっぱら政治領域の空間構造を前方後円墳の分布に注目し、分布の時間的推移から検討を試みるが多かった。しかもその対象地域には前方後円墳が多数分布する近畿地方がもっぱら選定されてきた。

④前方後円墳という墳形では共通であっても、その内部構造や内部主体には地域的な差が見られる点は、歴史地理学研究においてはほとんど考慮されることがなかった。

(3)①九州におけるいわゆる畿内型古墳文化の伝播は、これまでも考古学から指摘されていたことであるが、そのことは九州全域を対象として、必ずしも具体的な分布事象を通じて時期別、地域別に詳細に検討されてはいない。

②畿内型古墳文化の受容の実態をみる場合、埋葬に関わるものには精神的側面は無視できない。したがって、歴史地理学ではほとんど等閑視されてきたが、不可視である古墳の内部にも注目する必要がある。

③考古学からは内部主体が在地的な特色を有する前方後円墳の存在の指摘がなされることもあるが、その分布や地域性に関して触れられることはほとんどない。

④前方後円墳という墳形を採用し、外面的には畿内型古墳文化を受容しても、外からは不可視である古墳内部に、どれくらい伝統的な

要素を有しているか、またその程度と、そのような古墳の分布や地域的特色を明らかにすることで、九州における古墳文化の地域性や特徴を究明できると期待される。

(4)①上記の諸課題への接近は、前方後円墳数が近畿地方では900基近くに達し、九州地方でも600基を優に上回り、資料収集および資料操作には大変な労力を要する。

②GISデータベースを構築することによって、上記の諸課題への接近が容易になり、考古学からの研究には見られなかった地理学らしい視点が発揮できると期待される。

2. 研究の目的

(1)歴史地理学の立場から日本の古代国家が成立する直前の時期である古墳時代の九州地方について、前方後円墳の様々な属性の分布を把握することを通じて、近畿地方（特に後の畿内を中心として）の状況を踏まえながら、その地域性を明らかにする。

(2)畿内型の古墳文化の受容をめぐる地域的特色とその展開を明らかにする。

(3)九州における「前方後円墳体制」について再検討する。

(4)近畿地方主要部における前方後円墳の拡散について検討を加え、伝統的な文化要素が新たな前方後円墳の受容に伴いどのように展開したかを明らかにした上で九州地方との比較を行い、九州と近畿両地方の地域性を明らかにする。

(5)主要な前方後円墳の現況を把握し、保全に向けての問題点を検討するための基礎資料とする。

3. 研究の方法

(1)古墳時代を特色づけるもっとも顕著な造営物である前方後円墳を中心的資料とする。

(2)①前方後円墳の規模や築造時期をはじめその内部構造（主に石室の構造）・内部主体（主に石棺の種類と構造）・副葬品等に焦点を当て、基礎データとする。これには『前方後円墳集成』を活用する。

②九州だけでも前方後円墳数は600基を優に上回り、手作業での分布図作成等の資料操作は大変な労力を要するので、②で作成したデータを基にGISデータベースを構築して分析・検討する。

(3)前方後円墳の主要な属性ごと、あるいは属性の組合せごとの各種分布図を作成する。

①九州地方と近畿地方における前方後円墳

の時期別・規模別の数を整理し、両地域の比較を行う。

②前方後円墳の築造は、政治的には畿内勢力に服属したということの証ではあっても、外からは不可視である古墳内部には伝統的な要素を留めていると思われるので、古墳の内部構造や内部主体にも注目した分布図を作成する。

③②で作成した分布図をもとに、分布の地域的な差から九州内各地域の前方後円墳（畿内型古墳）の受容をめぐる地域的特色とその展開を明らかにし、地域性について検討する。

④畿内型の前方後円墳の政治文化が具体的にどのように、またどの部分が九州地方に伝播し受容されたのか、近畿地方の状況とも対比しつつ、当該地域の主体性にも注目しながら地域の状況に即して検討する。

(4)近畿地方における前方後円墳の分布に関して、属性や属性の組合せごとの分布図を作成して、前方後円墳の地域的展開および地域的特色について検討する。

4. 研究成果

(1)九州地方および近畿地方の前方後円墳に関して、ArcGISを利用してGISデータベースを完成させた。

(2)九州地方における前方後円墳の分布に関して以下のような興味深い知見を得た。

①築造時期と規模・数を見ると、3期から5期に大型化が認められ、6期には100m超の大型の割合が半減し、以降50m未満の割合が増加する小型化の傾向が窺える。また、100m超の大規模な古墳は全体の5%にとどまる。これに対して近畿地方では大型化の時期はほぼ同様であるが、100m超の大型墳の割合には大きな変化がみられない。大きな差がみられるのは100m超の大規模墳の割合が九州に比べ約16%と大きいことである(第1表参照)。

第1表 墳丘の時期別・規模別の前方後円墳数

時期	50m未満	50~100m	100~150m	150m以上	小計	不詳	合計	%
1期	13	8	1	-	22	-	22	3.5
2期	13	7	1	-	21	-	21	3.3
3期	4	23	3	-	30	1	31	4.9
4期	6	24	2	1	33	-	33	5.2
5期	10	17	7	1	35	2	37	5.8
6期	12	13	3	-	28	1	29	4.6
7期	10	16	2	-	28	2	30	4.7
8期	20	15	4	-	39	3	42	6.6
9期	39	38	1	-	78	-	78	12.3
10期	26	13	1	-	40	1	41	6.5
小計	153	174	25	2	354	10	364	-
%	42.0	47.8	6.9	0.5	-	2.7	-	-
不詳	164	74	5	-	243	27	270	42.6
合計	317	248	30	2	-	37	634	-
%	50.0	39.1	4.7	0.3	-	5.8	-	-
近畿%	51.3	29.0	10.5	5.5	-	3.9	-	-

②代表的な威信財の副葬品である青銅鏡の分布を見ると、九州地方では三角縁神獸鏡は舶載、仿製ともに前期古墳からの出土に限ら

れるが、画文帯神獸鏡は多くが中期後半から後期前半の限られた時期の古墳から出土するという相違が見られる。これに対して近畿地方では、前方後円墳では画文帯神獸鏡は奈良盆地（大和川流域）と近畿中央部からの出土のみで、三角縁神獸鏡が播磨西部揖保川流域に3か所、園部盆地、湖東平野にもみられるのに対して、出土する範囲が限定的で、より高次の威信財の様相を見せている(図-1参照)。

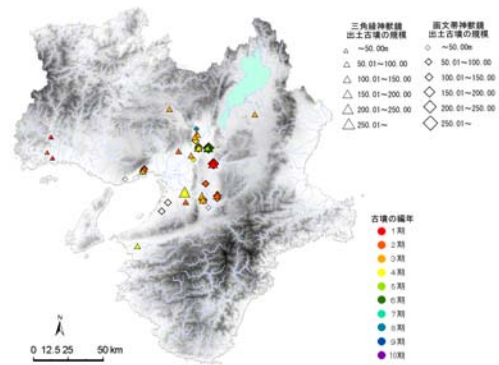


図-1 三角縁神獸鏡と画文帯神獸鏡の分布

③馬具類を副葬する古墳は北部九州に偏在し、後期古墳が8割を占める(図-2参照)。

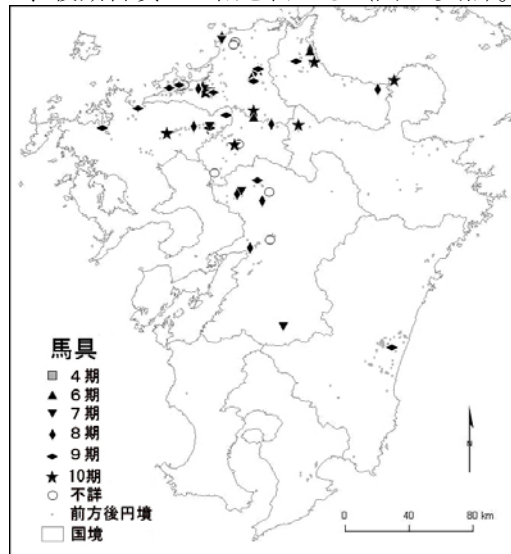


図-2 馬具類の副葬（九州地方）

近畿地方では、河内平野南部、淀川流域、湖東平野、奈良盆地で大半を占め、集中が顕著である(図-3参照)。

④箱形（箱式）石棺は前期古墳が過半数を占め、後期古墳は1割に満たない。地域的には3分の1が豊後に、2割が筑前西部に集中している。これに対して近畿地方では少なく、箱形（箱式）石棺が九州在地の伝統的なものであることを示唆するとともに、不可視である古墳内部には案外伝統的な要素を留めて

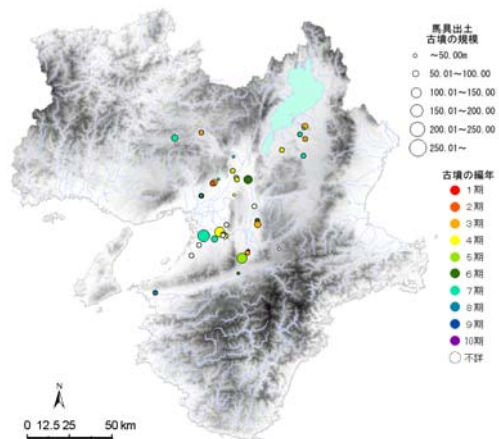


図-3 馬具類の副葬（近畿地方）

いることを示している。

⑤前方後円墳の集中地域である福岡県域と宮崎県域を比べると 50m未満の割合が 59%と 44%でかなりの差があり、いわゆる前方後円墳体制における古墳の規模の階層性は一樣ではないことが推定される。

⑥ 5期には西都原古墳群等日向中部の地域において、他地域に比べて規模の大きな前方後円墳が築造される（図-4 参照）。

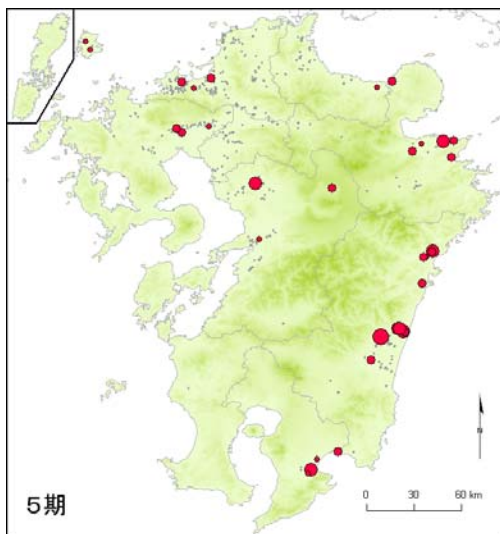


図-4 5期の規模別分布

⑦1期の古墳は低丘陵ないし段丘上に立地するものが多数を占め、2期になると相対的に比高が高い丘陵上への立地が多くなり、3期になると平野面への立地がみられ、立地の多様化傾向がうかがえる。これに対して近畿地方では3期においてもなお丘陵尾根等丘陵部への立地が大半を占め、4期に台地・段丘面への立地の割合が増大し、立地の多様化がみられる。

(3)近畿地方における前方後円墳の分布に関して、上記以外について以下のような知見を得た。

①大和川が河内平野に出てきた位置とそれに連続する地域に所在する玉手山古墳群から古市古墳群における大型前方後円墳の築造が、奈良盆地を含めた他地域には見られないほど長期間にわたり継続することが指摘できる。

②石製腕飾類の分布は近畿中央部に集中し、碧玉製腕飾はより分布が限定的である。

③馬具は、時期不明を除くと後期古墳に副葬されるものが大半であるが 10期には急減する（図-3 参照）。これに対して九州地方では 10期には若干減少する程度である（図-2 参照）。

④武器類は鉄剣や鉄刀は3期から5期の前方後円墳から多く出土している（図-5 参照）。

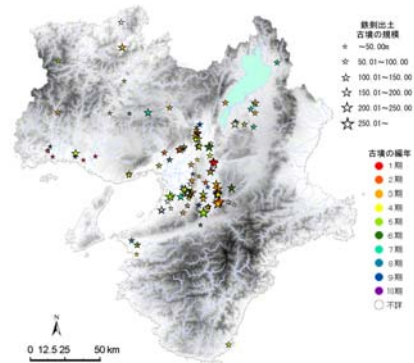


図-5 鉄剣の副葬—時期別・規模別（近畿地方）

これに対して九州では、鉄剣は1期から各時期に副葬がみられ中期古墳に特に集中するとの明確な傾向はうかがえない（図-6 参照）。

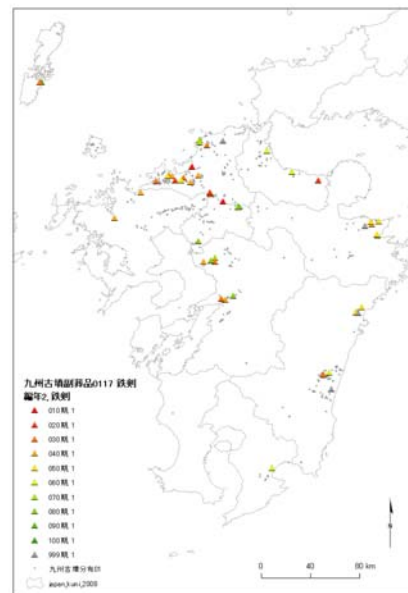


図-6 鉄剣の副葬—時期別・規模別（九州地方）

(4)現地調査の結果から、規模が大きな前方後円墳は地域の可視的歴史遺産としては分かり易いためか、比較的保存状況は良好で、墳

長が 50m 以上のものでは墳丘が整備されたものが相対的に多いことが指摘できる。一方、小規模な前方後円墳では保存状況が必ずしも良好でないものの割合が増加する。

(5) 発表論文および作成した主要な分布図と現地調査を行った九州の主要な前方後円墳についての一覧からなる研究成果報告書を刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

① 出田和久：九州地方における前方後円墳の分布論的検討—墳丘の規模と内部構造・副葬品の時期別分布を中心に—、奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告(査読無)、VII、2010 年、65-76

② 出田和久：「近畿地方における前方後円墳の分布論的検討—「奈良盆地歴史地理データベース」の利用による墳丘規模と副葬品の時期別分布を中心に—」、古代学(査読無)、1、2009 年、35-44

〔学会発表〕(計 2 件)

① 出田和久：「奈良盆地歴史地理データベースとその利用」、人文地理学会第 115 回歴史地理研究部会(共催 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会)、2009 年 7 月 26 日、帝塚山大学東生駒キャンパス

② 出田和久：「近畿地方における前方後円墳の分布論的検討—GIS データベース利用の試み—」、「人文科学とデータベース」第 13 回公開シンポジウム、2007 年 12 月 22 日、奈良女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

出田 和久 (IDETA KAZUHISA)

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：40128335

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者